



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

教員養成課程で考える外来語の表記と国語教育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白勢,彩子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166612

教員養成課程で考える外来語の表記と国語教育

白 勢 彩 子*

日本語学・日本文学分野

(2020年8月24日受理)

要 旨

本稿では、外来語表記のゆれについて、問題点と先行研究での指摘を整理し、国語教育における扱い、大学の演習授業への展開について述べた。「外来語の表記」は、外来語や外国の地名・人名を書き表す表記として片仮名が示され、これをよりどころとした表記が行われている。「外来語の表記」は2表から成るが、これらの構成によらず、仮名の特性から「外来語音片仮名」と「国語音片仮名」の2群に分かれるものと捉えられる。従来、外来語音片仮名、およびその表記の「ゆれ」について、日本語学の基礎研究では分布等の現状が報告されてきているものの、国語教育で体系だった学習はほぼなされていない。教員養成の課程において、実践的に外来語表記、特に、外来語音片仮名とした仮名群についての学びが必要と考え、外来語の表記におけるゆれの問題を演習授業として展開した。

キーワード：外来語、表記、片仮名、国語教育、演習

1. 問題の所在

本稿は、外来語表記のゆれについて、問題点と先行研究での指摘を整理し、国語教育における扱い、大学の演習への展開について述べるものである。

1. 1 片仮名表記

近年指摘される国語の問題はいくつかあるが、その一つに外来語、外国語の使用の増加がある。これに関して、文化庁は、平成29(2017)年度に「国語に関する世論調査」^[1]として、外来語についての意識を調査している。これによると、「外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか」との問いには、「よくある」と「たまにはある」を合わせた「ある」の回答が83.5%に上り、また、外来語の使用を好ましくないと感じる回答者のうち7割程度が「カタカナ語は分かりにくいから」を理由としていた。これらから、日常なことばの理解に、外来語の氾濫が影響していることがうかがえ、喫緊の課題であると

いえる。

外来語、外国語の流入が進む背景の一つに、外来語を書くための表記、すなわち片仮名があるのではないかと考えている。片仮名は元来、外来語を書き表すために用いられた仮名ではなく、漢字を省画することで速書きし、仏典を漢文訓読するための訓点として用いられたものである。外来語を片仮名で表記する具体例は新井白石『西洋紀聞』で、これを蘭学が受け継ぎ、明治時代の外来語の受容期を経て確立することとなった^[2]。

現在では、片仮名は「外来語の表記」^[3]として外来語や外国の地名・人名を書き表すよりどころとして示され、これに基づいて外来語の表記が行われている。しかしながら、「外来語の表記」は片仮名を定義したものではなく、あくまで外来の語の表記に使う仮名を示したもので、片仮名をどのような語の表記に用いるのかを示したものではない。片仮名は外来語以外にも用いられ、国語教育でも外来語以外の表記を指導している。文化庁の平成30(2018)年度「国語に関する

* 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 日本語学・日本文学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

世論調査^[4]によると、「ごみ」と「ゴミ」の表記のどちらがよいと思うかとの質問で、73%が片仮名表記の「ゴミ」を選択しており、片仮名の使用範囲が広がっている傾向がうかがえる。表記のどれが適切と思うかという、主観評価も片仮名表記の重要な観点になっていくと思われる。

1. 2 「外来語の表記」の問題点

「外来語の表記」は2表から成るが、本稿で問題としたいのは、表の向かって右側（以降、「右欄」）にある片仮名群である。図1^[3]は、「「外来語の表記」に用いる仮名と符号の表」である。第1表は、「外来語の表記 留意事項その1（原則的な事項）」に「国語化の程度の高い語は、おおむね第1表に示す仮名で書き表すことができる」とあり、第2表は、「国語化の程度がそれほど高くない語、ある程度外国語に近く書き表す必要のある語—特に地名・人名の場合—は、第2表に示す仮名を用いて書き表すことができる」こと、また、「第2表に示す仮名を用いる必要がない場合は、第1表に示す仮名の範囲で書き表すことができる」とある。

第1表のうち、右欄にある片仮名は、「外来語の表記 留意事項その2（細則的な事項）」の「I」に「外来音・・・に対応する仮名である」と特筆され、左側の欄（以降、「左欄」）にある仮名とは位置付けが異なる

るといえる。これらの、第1表の右欄の片仮名については、昭和29（1954）年国語審議会の資料^[5]では、例えば「ティ」「ディ」は「なるべく「チ」「ジ」と書く」などのように、第1表左欄の片仮名を用いる指針があり、新規に流入してきた外来音を表記する新しい仮名といえるだろう。

第2表の仮名については、「外来語の表記 留意事項その2（細則的な事項）」の「II」に、「原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名」とあり、必ずしもこれらの片仮名で表記せずともよいとの位置づけである。

「現代仮名遣い」^[6]との対応でいうと、左欄のみが平仮名との対応関係を持ち、右欄にある片仮名には、対応する平仮名はない。つまり、後者の片仮名は、いわば外来語専用の仮名として示されているといえる。2表に分かれてはいるものの、仮名の使用範囲からみて、右欄と左欄の2群に分かれ、右欄は「外来語音片仮名」、左欄は「国語音片仮名」といえる。

ここに述べたような経緯や、「外来語の表記」はあくまで「よりどころ」であり、強制するものではないことから、外来語音片仮名と国語音片仮名との間に交換が見られる、つまり、「ティ」と「チ」のように、表記に「ゆれ」がある状況となっている。この「ゆれ」には二様の意図があり、一つは、語形レベルの、同語の異表記（「バイオリン」と「ヴァイオリン」）、もう一つは、原音からみた異表記（「チーム（team）」と「ティー（tea）」、いずれも原音は [ti]）である。

外来語音片仮名が生じ、さらにゆれが生じることには、音韻変化との関わりがあるが、詳細は別稿等に譲る。

2. 外来語表記のゆれの現状

外来語の表記のゆれに関して、従来、主に語彙レベルでのゆれが調べられてきている。そもそも、原音に対してどの片仮名を用いるかについての研究がほぼなく、原音からみたゆれを整理することは難しいものと思われる。

2. 1 辞典調査

松崎^{[7], [8]}は、複数の辞典類（『情報知識imidas』（1990）、『コンサイス外来語辞典第四版』（1987）など）に、外来語音片仮名と国語音片仮名のどちらの表記が掲載されているかを調べ、どの仮名とどの仮名の間でゆれがみられるのか、またそれらの関係性についての類型を整理した。用例に基づき、定量的かつ体系

第1表				
ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ		ユ		ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ				
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ			デ	ド
バ	ビ	ブ	ベ	ボ
パ	ピ	プ	ペ	ポ
キャ		キュ		キョ
シャ		シュ		ショ
チャ		チュ		チョ
ニャ		ニユ		ニョ
ヒャ		ヒユ		ヒョ
ミャ		ミユ		ミョ
リャ		リュ		リョ
ギャ		ギユ		ギョ
ジャ		ジュ		ジョ
ビャ		ビユ		ビョ
ピャ		ピユ		ピョ
ン	（撥音）			
ッ	（促音）			
ー	（長音符号）			

第2表				
				シェ
				チェ
ツァ				ツェ
	ティ			ツォ
ファ	フィ		フェ	フォ
				ジェ
	ディ			
		デュ		
				イエ
	ウイ		ウエ	ウオ
クァ	クイ		クエ	クオ
	ツイ			
			トゥ	
グァ				
			ドゥ	
ヴァ	ヴィ	ヴ	ヴェ	ヴォ
			チュ	
			フュ	
			ヴュ	

図1 「外来語の表記」第1表、第2表

的に表記のゆれを調べた研究で、非常に示唆に富む。文献^[8]では、語彙ごとに、外来語音片仮名と国語音片仮名との出現頻度を検討し、どちらに偏るかは語彙により様々であること、ゆれが「原音志向により日本語音→外来語音へと向かいつつあるその過渡期に生ずるものが大半」と指摘している。

原音と片仮名表記の関係について、文献^[9]では、『コンサイス カタカナ語辞書 第4版』を資料とし、先行研究^{[7], [8]}で扱われた外来語音片仮名とそれに対応する国語音片仮名を中心に、音声記号と仮名の対応関係について調べている。例を挙げると、原語の発音記号が [fe] の拍は「フェ」の表記のみが用いられていたが、[fi] の拍では「フィ」「ヒ」「フェ」の表記があることがわかった。「フェ」をキーにしてみると、[fe] と [fi] の発音に用いられる仮名であるといえ、複雑な関係性が見受けられる。

2. 2 ウェブ調査、コーパス調査

福盛^[10]は、検索エンジンの「Google」を用い、外来語表記のゆれの用例調査を行っている。「ヴァ」「ヴィ」など「ヴ」の系列の片仮名を主に調べ、比較的新しい語彙で「ヴ」が用いられる傾向にあることを指摘した。先行研究^{[7], [8]}とは、対象とする仮名の重なりが少なく、比較がしにくいのが、外来語音片仮名の表記が増加しつつあるとの見解は共通しているといえるだろう。

大規模コーパスを用いた研究として、文献^[11]がある。『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』から用例を収集し、語末長音に焦点を当て、語彙レベルと原語の接辞との関連の2点から分析したものである。特に興味深いのは原語の接尾辞との関わりで、接辞の種類により、ゆれの生起傾向に大きな差があることが指摘されている。原語の発音あるいは日本語音に取り入れた際の発音の影響あるいは反映が考えられる。この研究を踏まえ、演習として外来語表記を学ぶ手立てを示したものとして、文献^[12]がある。

2. 3 表記の妥当性に関する研究

表記のゆれの生起には、異表記が存在することに加え、「こちらの仮名表記の方がより適切」という主観評価の影響も見逃さない。単^[13]は、BCCWJを調べた上で、外来語音片仮名と国語音片仮名の両形を持つ、すなわちゆれのある語彙208語について、表記の妥当性を判断させる実験を行った。表記形それぞれの生起頻度と妥当性判断との相関をとったところ、生起頻度が高ければ妥当性判断も高く、生起頻度が低けれ

ば妥当性判断も低いといった関係性が見られた。また、外来音仮名表記の妥当性が高く評定されると対応する国語音仮名表記の妥当性は低くなる傾向があり、その逆も成立していたことを明らかとした。

3. 国語教育における片仮名指導

国語教育において、片仮名表記の指導は、小学校低学年で実施するよう、学習指導要領^[14]に明記されている。しかしながら、学習内容は、現代仮名遣いに対応する国語音片仮名のみで、外来語音片仮名についての明瞭な指導事項はない。低学年の国語教科書には、片仮名の表が掲載されているが、平仮名の表（現代仮名遣い、いわゆる「五十音図」）と対応させるようにして仮名が掲載されている。

小学校国語の教科書には、片仮名で書くことばについての単元があり、「外国から来たことば」「外国の、国の名前や土地の名前、人の名前」の他に、「動物の鳴き声」「いろいろなものの音」が挙げられている^[15]。

片仮名表記の学習、教育は網羅的、体系的ではなく、片仮名の学習については、学習者の経験によるところが大きい。特に、外来語音片仮名については、その存在が無視されているかのように、取り扱いがほぼなされていない。その一方で、国名、地域名には多用されており、学校教育全体として扱われていないということではない。こうしたことも、表記のゆれが許容されてきている要因ともなっていると考えられる。

外来語の表記、外来音片仮名の扱いは、外来語の流入を考えると重要な問題であり、なぜこの片仮名なのか、この片仮名の発音が何か、なぜ表記が複数あるのかといった問題を、实例に即し（例えば、モーツァルトとモーツアルトはどちらなのか、ベートーベンとベートヴェンがありなぜヴェートーヴェンはないのかなど）、発音や表記の相違について、学ぶ機会はない。国語の教員としては、实例を基にした、体系的な理解が必要で、これから必須の知識となっていくのではないだろうか。

4. 教員養成課程における授業展開

4. 1 課題の設定

以上のような背景を踏まえ、筆者は、大学の教員養成の課程において、実践的に外来語表記、特に、ここで外来語音片仮名とした仮名群についての学びが必要と考えた。これを実践するには、大規模コーパスを用い、用例と分布を調べ、データを学習者自身が整理し

ていくことが目的に適切であると捉えた。これらの作業を通じ、外来語の表記や片仮名表記について、また、音と仮名の対応、語とは何かなど、日本語学の多くの問題を体験的に学ぶことができ、国語教育の場に生かせる知識を身近に学習することができると考えた。また、大規模データ処理の入門でもあることから、技術面で今後役に立つ知識を身につけることもできると考えられる。そこで、日本語学の演習授業にて、BCCWJ^[16]を受講生が用い、実証的、実践的に学習を進める内容を構築した。

4. 2 対象データについて

BCCWJは、新聞、ブログといったサブコーパスから成る、現代日本語の書きことばを集積したデータベースで、1億430万語のデータが格納されている。BCCWJの詳細については、本稿の趣旨とは外れ、また膨大な記述量であることから省略するが、関連する要点として、言語単位とそれに付与される言語情報(形態論情報)がある。

書きことば、すなわちテキストデータの処理において問題となるのは、どのような言語単位で分節するかという点である。BCCWJでは「短単位」と「長単位」が採用されている。前者は最小単位の一次結合までを最大とし、後者は文節を基準として認められる単位である。BCCWJにおける単位認定については、文献^[17]を参照されたい。

品詞や語種などの形態論情報については、短単位、長単位ごとに付与されており、短単位では解析用辞書UniDic^[18]に基づく情報である。長単位は短単位とは処理が異なるが、いずれも、「見出し」に相当する「語彙素」をキーとして情報が付与される。ここで問題となるのが、表記のゆれの処理である。ゆれとみなされれば語彙素(見出し)の下位項目として処理され、ゆれのそれぞれが独立した単位であるとみなされれば、それぞれが語彙素として処理されることになる。授業準備また学生の演習内容等を通じ、外来語音片仮名のうち、ゆれとして処理されているものとそうでないものがあり、これらの差異は第1表か第2表かの相違ともずれがあるようであった。また、同一の仮名でも、語彙のレベルで、ゆれとして扱われている場合とそうでない場合があった。さらに、人名、地名は第2表も登録されており、検索結果が人名、地名に偏ることとなった。これを追究することも必要ではあるが、短単位についてはUniDicに準拠することもあり、授業の目的とは逸れることが懸念され、深く検討することを避けた。が、演習内容とも関わる重要な

観点であったことは認識している。

4. 3 授業内容

複数の手段でBCCWJが公開されているが、本授業では、受講生の負担を考慮して登録制のデータベースの利用は避け、また、目的とする分析から考えて、「中納言」版公開データ」とオンライン版の「少納言」を利用することとした。コーパスは大規模データであり、実行するには、ある程度の情報処理スキルが求められるが、必ずしも実技面で足並みが揃うわけではない。そこで、初学者でも処理が実行できるよう、なるべく丁寧に解説することを試みた。授業内容等、以下に簡潔に示す。

授業のねらい

現代日本語の表記と発音の関係、特徴について、受講者の主体的な活動を通して実証的に学び取ることを目標とする。各自のデータ分析を中心とした活動を行うことで日本語の特徴を把握するとともに、データ分析における処理の実技と客観的視点を養うことをねらいとする。

内容

受講生一人に一つ、外来語音片仮名を割り当て、BCCWJ「中納言」版公開データの「短単位語彙表」「長単位語彙表」をダウンロードしてデータを検索する課題を設定した。データの容量が大きいことから、データ抽出にはコマンドプロンプトを用い、簡単な命令文による処理を実行することとした。

さらに、受講生自身で、抽出したデータをExcel上で整理し、生起頻度、サブコーパス間での生起傾向の相違等を整理してまとめ、発表の上、討論した。分析は、仮名レベルのゆれと語彙レベルでのゆれ双方に対して実施した。語彙レベルの分析については、同語形の異表記間(外来語音片仮名と国語音片仮名)の相対生起頻度も算出することも含めた。必要に応じ、語彙検索を「少納言」により実行するよう求めた。

受講またデータ解析にあたっては、前述の先行研究を読み、外来語音片仮名の問題点や、担当する外来語音片仮名とゆれの関係にある国語音片仮名を見出すことも課題とした。

データ分析等にあたり、受講生には、図2、3のような資料を含む解説資料を複数種作成し、配布して理解を促した。また、コマンドプロンプトや大規模データ処理に不慣れな者も多いことを考慮し、データの取得、解析についての動画(PC画面の記録動画)による説明資料も作成して、オンデマンド教材として配信した。

発表者としてデータの検索結果を示すだけでなく、

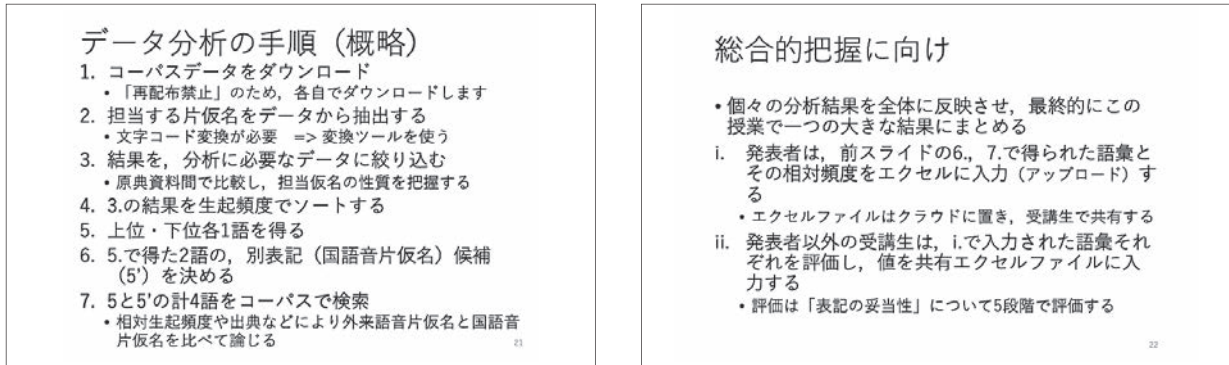


図2 指示内容の一部

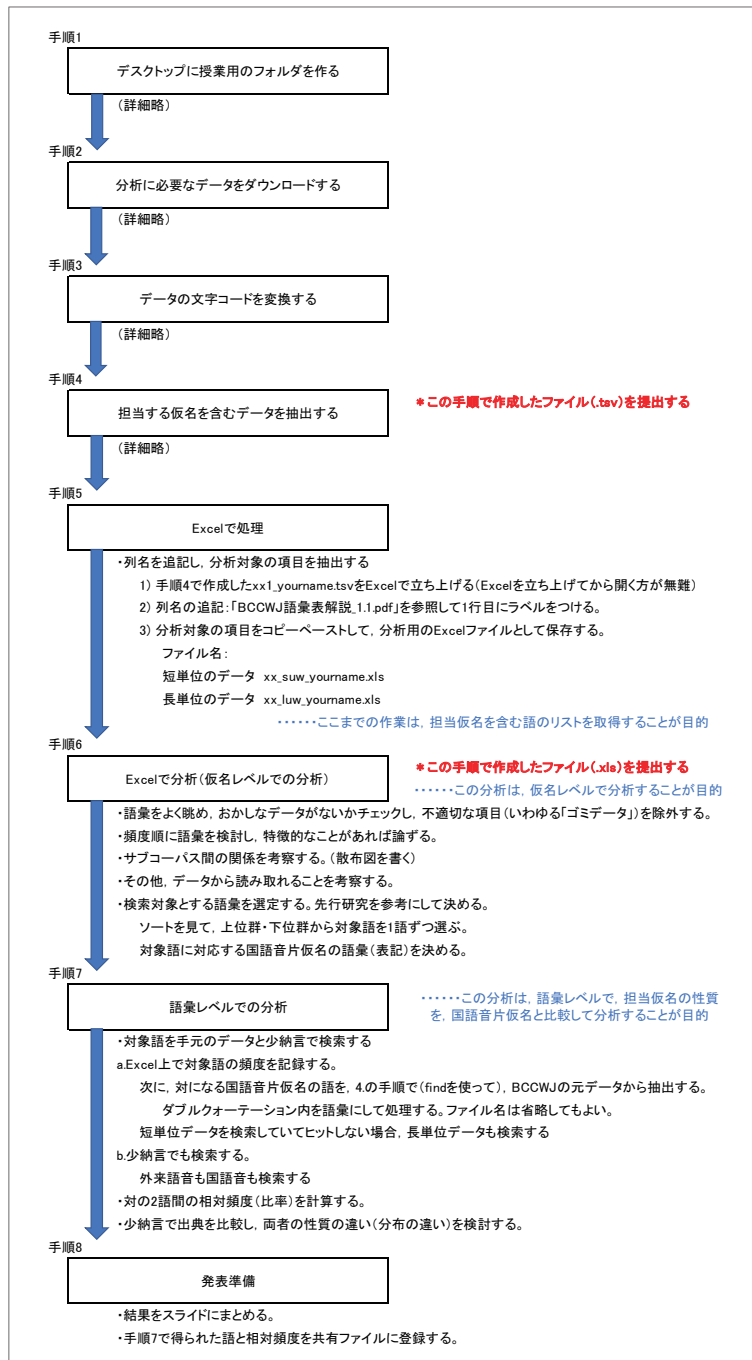


図3 指示書

Excelファイル上に、分析対象とした語彙とそれらの相対生起頻度を記録することも求め、受講生それぞれが各語彙に対し「表記の妥当性」を5段階で評価することとした。Excelファイルは、発表者が分析した語彙とその相対生起頻度を入力するシートを準備し、さらに受講生ごとのシートも用意して、発表者の入力内容（語彙）が反映されるように設定し、そのシート上に、個々の妥当性評価値を入力することとした。語彙と相対生起頻度、受講生全員の妥当性評価値の平均値が反映されるシートを別途、ファイル内に設定し、相対生起頻度と妥当性評価値の相関関係を見とれるようにした。これらにより、個々の作業内容を全体で共有し、結果を確認するフィードバックがなされるものと期待した。

4. 4 実習例

4. 4. 1 コーパス検索

受講生の演習内容を例示し、具体を示したい。第2表にある「ツァ」を担当した受講生は、まず、短単位の語彙表から「ツァ」を含む語を抽出し、52語を得た。これら52語の分布について調べるため、サブコーパスの「新聞」「ブログ」間の出現頻度の相関を検討

し、最頻語やサブコーパス間の相違を考察した。続いて、具体的な語例「インテリゲンツァ」「キンツァイ」を挙げ、対応する国語音片仮名表記の「インテリゲンチャ」「キンサイ」の計4語の生起頻度や出典を、「少納言」も用いつつ調査し、「ツァ」の及ぶ範囲は限定的ではあるが、用いられる場合には「ツァ」で定着しているとの結論を得た。

検索した語彙については、2語間の相対生起頻度を求めた。例えば、「インテリゲンツァ」「インテリゲンチャ」では、前者が1、後者が16の生起頻度で、相対生起頻度は0.06と0.94となる。これらの値を、教員が準備した、結果入力用のExcelファイルに入力した。受講生は、語彙（上記例でいえば「インテリゲンツァ」「インテリゲンチャ」）について、片仮名表記の妥当性を5段階で評価（[5] 妥当性高— [1] 妥当性低）し、入力した。

4. 4. 2 結果の統括

妥当性評価は、発表者の結果を表示するだけでなく、受講生の応答を含めた総合的な内容となる。受講生はおよそ40名で、一人につき4語を分析し、入力すれば160語の結果が得られることになる。4語だけ

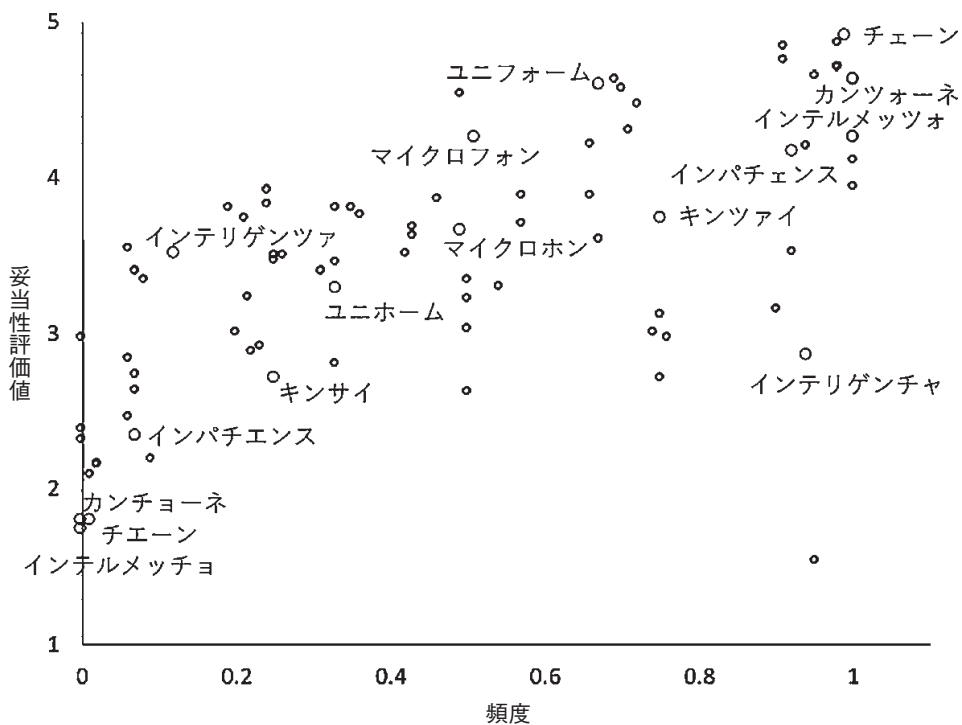


図4 相対生起頻度と表記の妥当性評価値の相関

では傾向がつかみにくい点についても、多くの語を総合的に検証することにより、より深い考察が可能になるものと考えられる。

図4に、16語の実例とともに、相対生起頻度と表記の妥当性評価値との相関の結果のイメージ図を示す。図の横軸は相対生起頻度、縦軸は表記の妥当性評価値の平均値を表す。図中の円一つがデータ一つ（一語）に相当するが、小さい円は結果のイメージであり、結果の概略がわかるように図示したに過ぎない。凡例とともに示された大きめの円は、受講生による実際の分析例である。受講生より許諾を得て、ここに掲載した。前節の語例も含まれており、例えば、相対生起頻度が0.06の「インテリゲンツァ」は、妥当性評価値が3.54との結果で図上にプロットされている。

全般に、相対生起頻度が低ければ表記の妥当性評価値が低く、相対生起頻度が高ければ表記の妥当性評価値が高いという正の相関関係が読み取れる。実例を挙げれば、「インテルメツチョ」「カンチョーネ」「チェーン」は、相対生起頻度も表記の妥当性評価値も低い群に該当する。一方、これらとは対比的に、「インテルメツツォ」「カンツォーネ」「チェーン」は、相対生起頻度も表記の妥当性評価値も高い群に該当し、順当な結果である。正の比例的な関係から逸れるものとして、「インテリゲンツァ」「インテリゲンチャ」があり、相対生起頻度には明瞭な差が見られたが、表記の妥当性評価値は逆転しており、非常に興味深い。また、「ユニフォーム」「マイクロフォン」などの相対生起頻度に大きな差がない語例、すなわち0.5前後のあたりでは、表記の妥当性評価値が高い傾向にあることも示されている。

このように、受講生の結果を一つの大きな結果として総括していくことで、個々の分析を相対的に位置づけられ、理解を促し、議論や考察を深めていくことができ、有益であると考えられた。

5. まとめ

本稿では、外来語の表記について、特に外来語音片仮名について問題点を整理し、大学授業の演習として学ぶ実践例を紹介した。外来語音片仮名について、その分布は先行研究により、ある程度把握されてきているといえるが、なぜその表記が用いられるのか、なぜゆれがあるのかという観点からの研究は少ない。国語審議会が示した方針^[5]が要因の一つとして挙げられるが、近年のゆれについては、これだけでは解釈が不能の場合もあり、「好み」のような主観的な評価による

ものもあると思われる。これについては、本稿で示したような表記の妥当性等の、仮名使用についての主観評価を求め、使用状況との関連を丁寧に検証する必要があると考えられる。

外来語の表記について、教員養成課程の大学の演習授業として展開した意義については、一つは、国語教育の場において、これまで見過ごされてきた日本語の問題に焦点を当てることにあると思われる。片仮名表記に関する学習内容は不足しており、経験的に学ぶ場面が大きいのが、今後、外来語の流入は拡大し、新規な音を表記する必要性も高まるものと考えられ、体系的に学習する機会が求められるようになると思われ。また、外来語の表記に限らず、国語教育で扱われる日本語学の知識は限られている面があり、特に中・高では文法面と漢字表記に重点が置かれており、他の側面については浅薄に偏りがちである。従来、周道的に扱われてきた内容についても、大きな問題があることの気づきを促すことが、大学の課程では肝要ではないかと考えている。これに関しては、人名、地名は第2表も用いた表記である一方、一般的な語彙についてはゆれが大きいなど、特に教科書の用語を引用して、授業内の議論が展開することも多々見受けられ、国語教育も含めた学校教育における片仮名の扱いについて、実践的に考察する機会ともなった。

補足的なことになるが、大規模データを扱うには、ある程度の情報処理の知識・技術が必要となり、従来も試みようとしたが実践には至らなかった。今回の授業展開には、オンライン授業化が大きなきっかけとなった。提供する資料を工夫することで、技術面を補完できるようにも思われた。今回の経験を踏まえ、今後も展開を試みていきたい。

なお、外来語の表記のゆれについては、これがあることによって、書き手の個性や表現の柔軟さ、豊かさが伝わる面もあり、必ずしも統一すべきとの立場ではないことを付言したい。

謝辞

本稿4.4および図4に示した実データは、東京学芸大学・国語科 小池櫻子、坂下友理、高橋直也、野間清香の各氏にご提供いただいたものである。この場を借りて、深謝いたします。

注

- 1 長音については、「外来語の表記」では「ー」の符号となる。

参考文献

- [1] 文化庁「平成29年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/r1393038_01.pdf (2020年8月20日最終参照)
- [2] 山本真吾 (2010)「文字史」日本語史概説, 朝倉書店
- [3] 「外来語の表記」https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/gairai/index.html (2020年8月20日最終参照)
- [4] 文化庁「平成30年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/r1393038_02.pdf (2020年8月20日最終参照)
- [5] 国語審議会「外来語の表記について」https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/sisaku/enkaku/pdf/06_153.pdf (2020年8月20日最終参照)
- [6] 「現代仮名遣い」https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/gendaikana/index.html (2020年8月20日最終参照)
- [7] 松崎寛 (1992)「外来語音におけるゆれの類型：辞書類の表記を中心として」言語学論叢, 10: 11, pp.43-56
- [8] 松崎寛 (1993)「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」東北大学文学部日本語学科論集, 3, pp.83-94
- [9] 単珊・白勢彩子 (2012)「現代日本語書き言葉均衡コーパスに基づく外来語音の表記に関する試論」第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp.289-296
- [10] 福盛貴弘 (2010)「母音ってヴォイン？」基礎からの音声学, pp.24-38, 東京堂出版
- [11] 小椋秀樹 (2014)「外来語語末長音の表記のゆれについて」論究日本文学, 100, pp.195-208
- [12] 小椋秀樹 (2020)「外来語の表記」コーパスで学ぶ日本語学日本語の語彙・表記, pp.103-127, 朝倉書店
- [13] 単珊 (2013)『新しい外来音表記の受容に関する考察』東京学芸大学修士論文
- [14] 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf (2020年8月20日最終参照)
- [15] 『こくご』二年下 (2020年度版), 光村図書
- [16] 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ (2020年8月20日最終参照)
- [17] 国立国語研究所「形態論情報」現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 利用の手引第1.1版 https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/manual/BCCWJ_Manual_05.pdf (2020年8月20日最終参照)
- [18] 「現代書き言葉UniDic」https://unidic.ninjal.ac.jp/download#unidic_bccwj (2020年8月20日最終参照)